

採火式の概要

東京 2020 パラリンピック聖火リレーで用いられます聖火は、パラリンピック発祥の地であるイギリスのストークマンデビルからの炎と 47 都道府県で生まれた炎が東京に集まり、ひとつの火となり東京を走るものです。

本日举行されます豊橋市の採火式で採られた火は、愛知県内の他の 48 市町村が独自の手法で採火した火とともに愛知県の聖火となり、開催都市の東京に旅立っていきます。

手筒花火紹介

<概要>

手筒花火は愛知県東三河地方を中心に伝わる花火で、450 年以上の歴史があり、豊橋市の吉田神社が発祥といわれています。揚げ手が花火の筒を脇の横に両手でしっかりとかかえるように持ち、巨大な火柱を噴出させ、最後に「ハネ」と呼ばれる炎が、大音響とともに足元に噴き出す勇壮な煙火です。

<歴史>

手筒花火の原形は、情報の伝達手段である「打上式の狼煙(のろし)」といわれています。戦国時代に登場した花火は、江戸時代の元禄期以降吉田の城下町に広まったといわれ、この地域が盛んになったのは、徳川家康が三河衆に火薬の製造をまかせたことが、花火の発展につながったとも言われています。

東三河の手筒花火は五穀豊穰、無病息災、家運隆盛、武運長久を祈る奉納行事として祭礼で揚げられています